

# コミュニケーションと相手の気持ちの理解が苦手な児童への支援

## 一通級による指導におけるICT活用と論理的思考の育成を通して

細川直弥（川崎市立富士見台小学校）・福山 創（川崎市総合教育センター）  
草柳譲治（川崎市総合教育センター）

概要：障害のある者と障害のない者が可能な限り共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育システムにおいて、全ての子どもが同じ場で共に学ぶ機会が増えることから他者との関わり方の必要性は増してくると考えられる。本研究では、自閉症の傾向があり、コミュニケーション面での課題を抱える児童に対し、フローチャートやゲーム要素のある教材を使用して、出来事の整理や、自分や他人の気持ち、言動の振り返りや予測を行う活動にICT機器を活用した授業実践を通級による指導で行った。これらの実践を通して、望ましい言動や他者の感情を理解しようとする姿がみられた。

キーワード：インクルーシブ教育，合理的配慮，ICT活用，論理的思考

### 1 はじめに

2006年12月の第61回国連総会において、「障害者の権利に関する条約」が採択され、2008年5月に発効された。（日本は、2007年9月にこの条約に署名、2014年1月に批准書を寄託し、同年2月に効力が生じた。）これを受け、中央教育審議会の特別支援教育の在り方に関する特別委員会は、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）（中央教育審議会2012）に、「障害者の権利に関する条約第24条によれば、『インクルーシブ教育システム』

（inclusive education system，署名時仮訳：包容する教育制度）とは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が「general education system」（署名時仮訳：教育制度一般）から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な『合理的配慮』が提供される等が必要とされている。」と示した。このこと

から、今後全ての子どもが同じ場で共に学ぶ機会が増えることから他者との関わり方の必要性は増してくると考えられる。

さらに同報告では、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も確にこたえる指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある『多様な学びの場』を用意しておくことが必要である。」とある。

教育の情報化に関する手引（文部科学省2010）では、気持ちや出来事の整理と自己コントロールや表現に関する場面の中で、「客観的な状況把握や場面認識が苦手なため、トラブルの原因が理解できなかつたり、原因と結果が一見してつながっていなかつたりする場合には、アウトラインプロセッサの活用やフローチャートの作成により、自分や他人の言動を振り返ったり、予測したりする活動にコンピュータを活用することが考えられる。また、通級による指

導の担当教員と連携することで、通級による指導の時間を使って、トラブルとなった出来事や日常の自己の行動や生活を振り返り、望ましい行動を促したり意識付けたりすることや、ソーシャルスキルトレーニングに活用することが考えられる。」としている。

本研究では、通級における指導での教育の情報化の一環として、自閉症の傾向がありコミュニケーション面での課題を抱える児童に対して、通級による指導でICT活用と論理的思考の育成を通して行った支援の取組を報告する。

## 2 研究の方法

対象となるA児の指導実践に基づいて考察を行う。

### 2.1 対象児童

○A児 5年生女児

2017年6月に市内A校の通級における指導(以下 通級指導教室)に入級し、現在も通級している。「コミュニケーション能力の低さ」と「相手の気持ちがわからない」という主訴で保護者から申込みがあった。通級指導教室の申込み前に療育センターで発達検査や医師による診察を受けているが、発達障害等の診断はついていない。

発達検査(WISC-IV)の結果から、言語理解の力は高いので、支援の有効な手立てとして考え

られる。また、定型的なことに対応する力も高いので順序立てて考えることも有効と思われる。

入級後のアセスメント期間を経て、「友だちとの関わりの少なさ」、「相手意識の不十分さ」、「本児独特の捉え」、「思考の固さ」が主訴の背景にあるのではないかと仮説を立てた。また、関係諸機関との情報交換からも、自閉症の傾向があると考えられた。

### 2.2 指導期間

指導期間を表1のように分けた。

表1 指導期間

時期(期間)	通級頻度
アセスメント期 (2017年6月~10月)	個別指導 週1回
第1期 (2017年10月~2018年3月)	個別指導 月2回 小集団指導 月2回
第2期 (2018年4月~)	個別指導 月2回 小集団指導 月2回

## 3 結果

アセスメント期・第1期・第2期の期間ごとに、在籍校や通級指導教室の様子から短期目標を立て、支援計画を立てて取組んだ(表2, 表3, 表4)。

表2 アセスメント期の支援と結果

児童の様子	○支援(てだて) ・結果 <次期の課題>
◇声が小さく聞き取りにくい話し方のため、担当が聞き返すことも多かった。また、自分の思いや考えが伝わらないと「もういい。」と怒ってしまい、自分からかかわってほしいという感じはなかった。	○基本的なコミュニケーションスキルの未学習がみられたので確認を行った。(ソーシャルスキルトレーニング) ・「うなずき」「あいづち」や「声のものさし」(場面に応じた声の大きさを意識するために声の大きさを視覚的にとらえられるようにした掲示物)などは少しずつ意識するようになった。 <自分の思いや考えが伝わらないと感じると、話合いをしない。>
◇思った事をすぐに言うことが多い。	○「心の声」を学習した。思ったことを声に出して言うことで、相手を嫌な気持ちにしたり、失礼になったりする事があるから場合によっては声に出さず、心にとどめておくということが大切だと説明した。(スライド教材) ・「知らなかった。そうなんだ。」と理解を示していた。 ○確認で「心の声クイズ」を行った。(スライド教材) ・19問中8問の正解で、担当から不正解の理由を説明すると、「だって○○だから。」や「普通は△△。(一般的な考えとは異なる)」と自分の考えで反論をしてきた。

表3 第1期の支援と結果

短期目標	1 相手との話合いの中で折り合いをつける経験をする。 2 物事を順序立てて考え、整理することができる。
児童の様子	○支援(てだて) ・結果 〈次期の課題〉
◇状況に応じて作戦が変わるような活動で、ゲーム開始前に詳細に作戦を立てようとする姿がみられた。担当からルールの確認をしても受け入れず、作戦を立て続けることがあった。	○状況把握の苦手さに対する合理的配慮として、活動を撮影し、動画で振り返りをする。(撮影した動画) ・自分の様子を見て、担当の話を受け入れた様子が見られた。
◇思考の固さ等から、話合いにおいて、折り合いをつけるのが難しい。	○友だちも、色々な考えを持っていて、より良い方法があるかも知れないことと伝えた。それに対応するために、論理的思考の育成のために、事前にフローチャートを作成して、話合いの練習をした。(フローチャート) ・次の学習で、本児が作戦会議を進めようとしたところ、他の児童が違う意見を出して話を進めたが、受け入れることができた。 (相手の意見の受け入れと、自分の意見の主張)
◇学校でのトラブルについて、原因が解らなかつたり、納得できなかつたりする様子が見られた。また、説明する際に、自分の思いだけ話し、相手に伝わりにくい。	○場面認識の苦手さに対する合理的配慮と、論理的思考の育成のために、フローチャートを作成しながら聞き取りを行った。また、学習成果を確認するために、ゲームの要素を取り入れた教材を用いて行った。(フローチャート、スライド教材) ・はじめのうちは印象が強い事から話し物事の順序が錯綜したが、何度も作成していくとA児も整理して説明できるようになってきた。完成したフローチャートを見て、トラブルの原因や問題点を見つけることも徐々にできるようになってきた。ゲーム教材も、はじめは作成したフローチャートを見ながら取り組んでいたが、回数を重ねるごとに確認する回数が減ってきた。

表4 第2期の支援と結果

短期目標	1 相手意識をもって関わり、意見を受け入れたり、折り合いをつけたりできる。 2 物事の原因をふり返ったり、相手の気持ちを考えたりすることができる。
児童の様子	○支援(てだて) ・結果 〈次期の課題〉
◇第1期において、自分の考えと違う意見が出ると、すぐに受け入れる様子が多くみられた。	○活動を事前に練習し、どんな意見が出るか予想してフローチャートを作成して話合いに臨んだ。(フローチャート) ・最終的に友だちの意見を納得して選んだが、自分の意見を理由もあわせて説明することができた。
◇第1期において、自分の気持ちだけで、相手まで意識が向いていない様子が見られた。	○グループの友だちを意識して見ることを目標に設定した。 ・「どんな雰囲気の子か」を考えたり、話合いが上手く行かなかつたりした時に、「○○さんは困っちゃった感じだった。」など、振り返りの時に考えることができるようになってきた。(撮影した動画)

今期の特徴的な児童の様子

小集団指導の時間の最後に、児童間の自然な関わりを持つ場を持たせるため、自由時間を設定した。その際、「2人以上で活動する」という条件をつけ、相手の事を考えて活動するように指導した。その結果、なかなか輪に入れない児童の所に行き、「一緒にやろう」と声をかけることができた。

本市の5年生は自然教室という宿泊学習に参加する。その部屋割りの話合いの際に起こりそうな事を予想し、自分でフローチャートを作成することができた。後日実際の話合いで折り合いをつけ話合いで決めることができた。

入級当初行った「心の声クイズ」を再度行った。結果は19問中18問の正解だった。不正解だった1問は、「友だちのシャツが出ていることに気付いた時どうするか?」というもので、本通級指導教室では、「友だちにはこっそり教える」を正解としている。A児は言わないことを選択したが、「言われたら恥ずかしいかな?でも教えてあげないと気付かないかな?」と相手意識を持って考えることができた。

## 4 考察

A児の特性として、「本児独特の捉え」や「思考の固さ」があり、その場で他者の意見を受け入れることが難しかった。動画での振り返りは、客観的に自分の姿を見られ、出来事の原因から結果まで見られるので、自分の思いや考え、行動がどうだったかを考えるのに効果的と考える。

第1期から取り組んだフローチャートの作成は、はじめは意見が分かれるポイントの予想や、時系列の確認・修正を担当主導で行うことが多かった。しかし、回数を重ねるごとに担当からの確認は減ってきた。第2期では、一人でフローチャートをつくり、実際の話合いの場で活用することができた。(図1)このことから、自分や他人の言動を振り返ったり、予測したりする活動に効果があったと考えられる。

ゲーム的要素を取り入れた教材(スライド教材)は、はじめは作成したフローチャートを見ながら取り組んでいたが、回数を重ねるごとに確認する回数は減ってきたことから、論理的思考の育成に効果があったと考える。

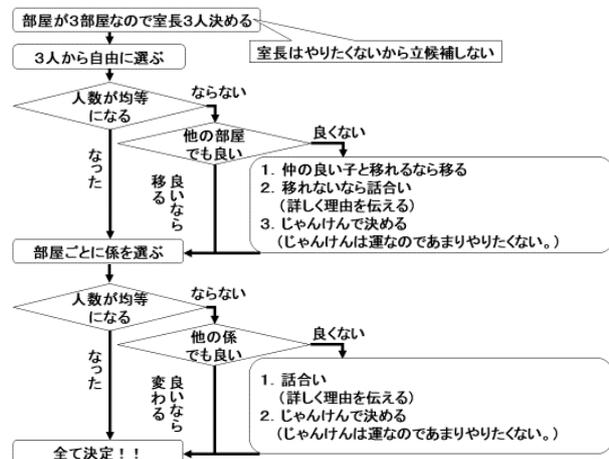


図1 A児が作成したフローチャート

## 5 結論

フローチャートの作成は、物事を順序立てて整理したり、トラブルの原因を見つけたりするなど論理的思考の育成に有効であった。また、論理的思考を育成することは、フローチャートの作成をよりスムーズにし、客観的な状況把握や場面認識の苦手さを克服したり、事前にトラブルになりそうなことの予想を立てたりするこ

とができるなど効果があった。このように、「フローチャートの作成」と「論理的思考の育成」は相互に影響を与え合っていると考えられ、コミュニケーション面での課題を抱える児童に対し、望ましい言動や他者の感情を理解しようとする支援の一助になるのではないかと考える。

また、コンピュータやビデオカメラ等のICT機器は、フローチャートの作成だけでなく、動画で自己を客観的に振り返り言動について考える際に用いたり、ゲーム的要素を取り入れた教材(スライド教材)で使用し論理的思考の強化をしたりするのに効果があったと考える。

## 6 今後の課題

通級による指導は、より一人一人の教育的ニーズに合わせた教育を、個別指導や小集団指導によって行っていくため、学級担任との連携が重要となる。本研究では、学級担任の協力もあり、学校での様子や行事予定などを詳しく聞くなど、情報交換を密に行うことができた。そのため、よりA児にマッチした教材を作成したり、活動案を考えたりすることができた。

しかし、本研究で行った支援は、起こってしまったことの振り返りと、これから起こることを予想し、準備することである。学校生活の中では予想外の出来事や、突発的に取り組まなければならない活動がある。通級開始当初から比べると、対応出来ることは増えてきているが、まだ十分といえない部分もある。今後も成功体験を積み重ね、活動の幅が広げられるよう児童への支援に取り組んでいきたい。

## 参考文献

- 国際連合(2008) 障害者の権利に関する条約 (Convention on the Rights of Persons with Disabilities)
- 中央教育審議会(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)
- 文部科学省(2010) 教育の情報化に関する手引